

今回は勝手な画論を書く。前編と後編に分ける。一部の会員に淡彩画と短歌の共通性、相互性について話した事があるが、たまたま彼と彼女は短歌の何たるかを知らなかったもので、話しは通じなかった。だから、なるべく話しが通じるように述べようと思う。

両者の最大の共通点は何といても写生である。写生という言葉は翻訳語ではなく、日本語だと思う。昔の支那（中国ではない）の画論にある言葉を流用したのだということの中川一政か齋藤茂吉の本で読んだ気がする。1867年（慶応3年）出版のアメリカ人ヘボン著——“A Japanese-English and English-Japanese Dictionary”をひもどけば判るのではないかな。きっと、ヘボンちゃんは「写生」を「デッサン」とか「スケッチ」とかに訳したのだろう。「素描」は日本人の誰かが、「デッサン」や「スケッチ」を邦訳したのだろう。怠惰な私はまだ図書館で「ヘボン」を調べていない。

短歌の場合も淡彩画の場合も、現地で作品を完成してしまう時と、家に持ち帰って完成する場合とがある。熊谷さんや中川さんは、確か現地主義ではなかったか。安野光雅さんはアトリエ主義か。現地完成の場合の更新、改作については後で述べるが、まず現地未完成の場合について述べる。短歌では現地のメモを基にして、完成への作業をする。机に向かってひたすら、脳漿を搾るのである。“expression”は「果物の汁を搾り出すこと」であった。これが、何時の間にか「表現」となった。だから、表現するには、唯単に現す、書く、描くのではなく、脳味噌から智慧を搾り出す作業がなければならない。一行のメモ、一つの単語、粗雑な一首を持ち帰って、机に向いあう。たちまち出来上ることもあるが、一週間かかることもある。ほっぽらかして、机の引出しから一年たって出てきた歌を見て、はっとして、出来上がることもある。淡彩画も、これによく似ている。

私は、ダーマトグラフのあと、二色か三色をうすく塗って二枚目に掛かる。仕上げの彩色は家に持帰ってからする。同じ場所へ、簡単に行けない時とか急ぐ時には、早書きの余白にメモをする。季節、天候、時刻、描いた動機、特色、色合、景色のポイントなどである。景色を不完全な一首にすることもある。

なんとか仕上げたら、この作品を前に置いて改作をする。けして模写ではない。何度も何度も改作する。この改作が最近のノウ・ハウである。紙数がなくなったので、後編は次号に譲る。今回は、ビール500 CCで書いた。